

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>(1)道徳教育の充実 ・高校生として望ましい規範意識、生活習慣を確立する。 ・自己肯定感を高めるとともに、他者に対する思いやりなど、周囲と豊かな人間関係を構築することのできる豊かな心を育む。 (2)キャリア教育の充実 ・社会的問題に関心を持ち、社会の一員であることを自覚させる。 ・探究活動をおして、社会的問題の解決に向けて必要となる能力を育成する。 ・将来の生き方を前提とした進路指導を展開する。 (3)高い志を有し、学ぶ意欲を向上 ・将来の生き方を考えさせることで主体的に学ぶ姿勢を涵養するとともに、社会問題の解決に向けて必要となる確かな学力を育成する。 ・授業をととして論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力を高める。</p>	<p>今年度の重点目標</p>	<p>(1) 基本的生活習慣の確立 (2) キャリア教育の充実 (3) 主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上 (4) 情報収集、情報発信の充実</p>
---------------------------	--	-----------------	--

年度当初				評価結果(3)月			
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
基本的生活習慣の確立	①コミュニケーション能力を向上させる	きちんと立ち止まってる挨拶は、外部から好評を得ている。 挨拶はほとんどの生徒ができています。 授業や集会での聴き方、積極的な発言など場面に応じた行動がとれない生徒が見られる。	・自然に自分からさわやかな挨拶ができる。 ・授業や集会などで顔を上げて、きちんと話を聴くことができる。 ・TPOを意識した行動や、積極的に自ら発言をすることができる。	・積極的、意欲的な行動や姿勢をとった生徒を褒めて育てる。 ・生徒会を中心に、生徒同士で挨拶をかわす機会をより増やす。 ・礼儀を正すことがコミュニケーションの基本となることを、さまざまな場面で生徒に伝える。	・今年度のS1生には自分から挨拶できる生徒が多い。保護者アンケートでもS1保護者は89%と高く、学校全体でも83%の評価で良好ある。 ・生徒アンケートでは、72%の生徒がコミュニケーション能力が高まったと感じており、特にS3生は82%と高い。 ・授業や集会での聴く姿勢はよい。講演を受けての質問等については、意欲的な発言は多くはなく、さらなる積極的な姿勢がほしい。	B	・挨拶することの意味等をHR等で繰り返し話すなど、さわやかな挨拶ができるよう継続して指導する。 ・授業も含め日常的に発言できるように、生徒に多く発表する機会を与える。
	②時間の使い方の意識を向上させる	・目標を設定し、予習・授業・復習の良いサイクルの確立に努め主体的に取り組む土壌ができつつある。 ・学習習慣の定着は生徒による個人差が大きく、教科的にも偏りがある。部活動に多くの時間を費やしている生徒の中には課題や諸テストの準備に十分な活動ができていない生徒もいる。 S1:欠席や遅刻のない生活をしようとして自己管理に努力している。 S2:遅刻、欠席は通院を除きほとんどない S3:通院、体調不良等による遅刻を除けば遅刻はほとんどないが、時間ぎりぎりまで登校する生徒がいる。 ・集会等の集合状況はよいが、整列に関してはまだ十分とは言えない。 チャイムが鳴った時点で授業の準備ができていない生徒は増えた。	・四点固定を意識し、基本的生活習慣の確立ができています。特に授業を中心に見据えた、家庭学習(予習・復習)の時間の確保、習慣化ができています。 【家庭学習時間目標】 S1・2:2時間以上の生徒が70%以上 S3:総体前2時間以上の生徒が70%、総体後5時間以上の生徒が50%以上 ・課題の意味を理解し、課題提出状況が100%となっている。	・引き続き「生活の軌跡」を活用し、面談を通して家庭での学習習慣の指導を行なう。 ・授業時に予習状況の確認を行う。また課題提出の状況、内容チェックなどの取組を継続し、未提出者への指導を徹底する。	・家庭学習時間が2時間以上の生徒はS1で平均59%、S2は53%で70%には今一歩であった。S3は総体前74%で目標を達成し、総体以降も着実に家庭学習時間を増加させ、5時間以上の生徒が平均して56%であった。調査前は集中して学習に向かうが、それが普段の取組とはなっていない現状が課題である。 ・課題の工夫や内容チェックについては各教科が意識して取り組んだが、課題の提出が徹底しない特定の生徒が10名程度おり、継続的な指導が必要。	B	・定期考査ではない期間の家庭学習時間を確保させるために今後も、日々の予習復習、週末課題を工夫し、こまめなチェックをおこなって、毎日確実に学習に取り組ませる。 ・課題の未提出者への指導を引き続きこまめにおこなっていく。週末課題などについては、当該教科だけでなくステージ全体で、放課後取り組ませ、その日のうちに提出させるなど、指導を徹底する。 ・主体的な学習者を育成するために、機会を捉えて啓発を促す。
キャリア教育の充実	①チャレンジグループ活動の計画的な実施、及び内容の充実	・社会人講師等の講演により、生徒の進路意識が高まった。 ・フィールドワークで実際に現場(地域)を訪れて調査する生徒も増えた。 ・昨年度採用したチャレンジノートは利用しやすく、記録の保存として活用できた。 ・チャレンジグループ活動で取り組んだ研究テーマと結びついた進路を選択した生徒の割合は約8割である。 ・社会に対する関心が希薄なため、自ら進んで社会と関わろうとせず、個人研究もネットワーク上の情報を写すだけという生徒も一定数いた。	・社会に対して関心を持ち、自ら気になる課題、解決の探究テーマを設定してフィールドワークなど適切な調査活動や情報収集を行ない、論理的・合理的な結論を出すことができる。 ・チャレンジグループ活動をおして、自らの進路目標を明確にし、将来、社会貢献しようとする態度を身につけ、問題解決能力を養う。	・過去のチャレンジグループ活動の情報を整理し、年度当初の活動がスムーズに行えるようにする。 ・個人探究の具体的なテーマをS2の早期に設定し、長期休業中を利用した活動を計画させる。 ・チャレンジノートを有効活用し、様式の充実や記録の工夫を図る。 ・研究テーマに応じた、調査方法、情報収集の仕方について、適宜指導し、完成度の高いレポート作成に向けた工夫を行う。 ・上級学校における学びや職業の選択と結びつけ、将来につなげる取組とする。	・S3研究内容をレポートとしてまとめた。 ・S2探究テーマは全員設定済み。個人研究を行い始めた。 ・チャレンジノートは有効に活用できている。 ・S1・2のアンケートは3月中旬(全日程終了後実施予定) ・S3アンケートでは97%を超える生徒が探究活動によって、知的好奇心が深まったと回答している。また、89%の生徒が自身の進路目標に対して好影響があったと評価している。 ・ただ、生徒によって取り組み方に差がある。	B	・次年度に向け、チャレンジノートをより簡潔で分かり易く、使いやすいスタイルに改善する。(現在行っている。)
	②地域のことを知り、アウトプット能力を向上させる	・ステージ主任間で連携を図り、3年間を見通した活動の流れを体系的に整理している。 ・各グループの担当教員が3年間を意識して活動を行っており、生徒の取組も体系化されてきた。 ・グループ活動内の連携は少しずつできてきたが、全体で共有する場の設定が少ない。 ・チャレンジグループ活動の意義やねらいを年度当初に説明したが、自己研鑽している生徒は少ない。	・3年間を通した指導目標・方法・計画を担当教員が共有し、運営できている。 ・各グループの動きがすぐに把握できるように、昨年度の資料などが整理できている。	・ステージ主任会で各ステージの状況を確認しスムーズな運営とする。 ・各分野ごとの担当教員の情報交換・連携を密にする。 ・職員会議等の研修の時間を活用して、チャレンジグループ活動の運営上の課題を明確にし、解決する。 ・研修旅行には次年度のメンバーを加え、研修終了後に時期を逃さず引き継ぎを行う。 ・キャリア教育全体計画を熟読し、ねらいを明確にする。	・各ステージ主任間で連携が図れた。 ・S3の個人探究活動は計画的に行うことができた。 ・S2についても、次年度の発表時期前倒しに対応して、活動を始めた。 ・研修旅行にS1主任が同行し、次年度に向け、引き継ぎを行ったが、全体として振り返り、検証する機会がない。	B	・今年度の各分野での教員の引き継ぎに関しては、3月中旬に開催予定しているが、全体で研修内容等を検証する場が欲しい。(例えば、訪問先にアンケートを取るとか、年度末反省に枠を設けるなど) ・来年度の取組の、目的や内容について年度末反省で協議して共通認識を図る。
		・フィールドワークに関西の訪問先、研修内容や、研究テーマに関する情報収集などが図書館でまとめてあり、チャレンジグループ活動全般で活用されている。 ・県内の情報発信・提供の取組みや文化活動についての視野を広げるため、県立図書館・博物館・出版事業者等の見学を行っている。 ・展示や講座を通じて、地域や進路に関わる情報を提供している。 ・図書館での一人あたりの貸出数が15.4冊である。	【図書館活用】 ・生徒が知識を習得するために、自主的に読書をしている。 ・生徒の進路意識や地域に対する関心を高めるため、適宜情報を提供している。 ・図書委員会を定期的に開催し、展示内容や展示物を工夫している。 ・チャレンジグループ活動コーナーの図書の実用を図る。	【図書館活用】 ・フィールドワークに関西研修の内容充実のために、訪問先等の情報収集を更に進め充実を図る。 ・図書委員会を月1回開催し、生徒の意見を取り入れてより効果的な図書館活動を工夫する。 ・チャレンジグループ活動コーナーの図書の充実を図る。	・チャレンジグループ活動コーナーを設置し、各グループの推薦図書やフィールドワークに関西の関連書籍を配架した。 ・図書委員が『図書館だより』に掲載する本の紹介記事を執筆し、購入図書の選書や高校生サイズのキャッチコピーを作成した。 ・県立図書館や博物館、公文書館の見学を行い、情報発信・提供の仕方について学んだ。 ・図書館展示や校内での掲示を通して、郷土の歴史・文化や、シンガポール研修などに関連する情報提供を行った。 ・チャレンジの参考図書のコーナーを設けて各自が調査研究できる体制を作った。	A	【本年度の活動の継続】 ・『図書館だより』や図書館内の「先生の本箱」などを活用して各教員が適宜、チャレンジグループ活動や進路選択、学問に関わる推薦図書を生徒に紹介する。 ・中部地区図書委員交流会への参加や冬休み中の蔵書点検、『図書館だより』での書籍紹介など、図書委員の主体的な活動を通して、図書館の有効活用を図る。
		S1:キャリア教育の目的を理解し、チャレンジグループ活動に積極的に取り組もうとしている。 S2:4月から各グループに分かれ、チャレンジグループ活動における探究の手法としてのフィールドワークに関西研修に向けて準備をしている。 S3:・S3では既に個人研究に取り組んでいるが、進捗状況に差がある。 ・積極的に図書館を活用している。	・講演や体験及び各活動を通して、具体的なビジョンを持ち、社会や自らの関心に対する理解を深め、その後の学習意欲や進路意識を高めている。 ・自分で体験・調査・探究したことなどをまとめ、相手に分かりやすく伝えるようなプレゼンができる。	・教員が各分野に対する研究をし、生徒に対して適切な指導をする。 ・各生徒に、感想や記録を取らせてチャレンジノートに残し、成果や課題を明確にさせる。 ・プレゼン能力講演会を開催し、まとめ方や発表方法に関わる技能を向上させるとともに、S3次には個人研究をレポートの形でまとめさせ、成果や今後の課題等を明確にする。	・チャレンジグループの活動においてはフィールドワークに関西も含めて意欲・意識の向上がみられた。 ・プレゼンテーションも上手に行うことができ、S3で最終段階としてレポートを作成させたことはよかった。ただ、生徒の指導に対して時間がかかったこともあり、作成する時間とゴールをあらかじめ設定する必要がある。	B	・生徒対象に講演会等を行い技量の習得や意識の向上を目指すだけでなく、職員対象にも講演会や研修会を施し、指導力の向上を図る。 ・レポートにまとめることを最終形にするが、その期間を限定してレポートを作成させたことはよかった。ただ、生徒の指導に対して時間がかかったこともあり、作成する時間とゴールをあらかじめ設定する必要がある。
S1:ボランティア活動に参加して、地域や社会の状況を知る事により、貢献しようという気持ちを持っている。 S2:ボランティア活動に、自主的に参加している生徒が多い。 S3:ボランティア活動には多くの生徒が、明確な目的意識を持って参加している。 平成28年度のボランティア参加者は、全校で延べ184名	・ボランティア活動を自己研修の場とし、地域に対して貢献する気持ちを持つ。体験を元に学校行事などに積極的に取り組めるようになる。 S1:ボランティア活動に全員が年1回以上参加し、社会の中での自分のあり方を考え課題について自分なりに方策を考えている。 S2:ボランティア活動を自己探究の手法ととらえ、チャレンジグループ活動とリンクしていく。 S3:ボランティア活動に参加することで地域貢献をする。	・ボランティア活動に行く前の事前指導を行い、参加して学び、気づき考えたことを記録し、ホームで報告する。 ・特に夏休みなどのボランティア活動への参加を奨励する。 ・講演会やステージ集会、学年通信を通じて、生徒が地域貢献・社会貢献に積極的に関わる態度を養い、人間の生き方について考えさせる。 ・チャレンジノートを積極的に活用させる。	ボランティア活動を通し、自己肯定感や社会貢献意欲を高め、地域活動、体験学習、オープンキャンパス、倉吉高校生フォーラムなど校外の活動にも参加することで意識の高揚があり、概ね評価できる。 ・1月末時点で延べ参加人数は276名で、全校の78%が参加した。 ・参加回数や積極性などで個人差は大きい。	B	・年度当初だけでなく、機会をとらえてボランティアの意義について話していく。(運営面のスムーズ化) ・情報収集して、生徒に勧めるべきものとして提示する。		
・生徒会活動では、生徒が主体的に活動できるシステムが機能しており、生徒会執行部を中心に頑張っている。 ・生徒会活動や部活動の経験を活かして、進路実現をめざしている生徒が多い。	・生徒会活動を通して、生徒が責任を持って主体的に取り組むことに喜びや達成感を得ることができる。 ・生徒会活動を通して、生徒の社会貢献や地域貢献への意識が高まり、進路実現に向けた意欲と結びついている。	・生徒会主体の運営や活動を成功させるために、企画・運営のマニュアル化、準備、練習を充実させる。 ・生徒アンケートで、生徒会活動への評価項目を設ける。	・生徒会活動における生徒アンケートの評価は79.9%から75.3%と若干下がったが、活動のマニュアル化等によって高い値を維持しており、評価できる。 ・西高祭では地域の方にも喜んでもらえるチームパレードなどの企画をたて、好評だった。 ・開催時期の固定化により、すべての企画の準備に取り掛かるのが早くなった。 ・生徒会活動の興隆が地域貢献意識や進路意識には十分には繋がっていない。	B	・活動の意義を明確に生徒に提示することで、生徒会活動や部活動での経験を、今後の自分の進路実現につなげられる指導を行う。 ・今後も行事を固定して定例化し、西高生徒会活動のスタイルを確立していく。(運営面のスムーズ化) ・西高祭来校者対象のアンケートを工夫するなど、地域貢献のあり方など来場者の声を聞く。		

評価項目	具体的項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上	①アクティブラーニングの視点を取り入れた授業の工夫	・十分とは言えないが、授業を大切にしている生徒の意識が高まり、教員の設定した目標に主体的に取り組む土壌ができてきた。 ・アウトプットの機会を盛り込み、工夫ある授業が増えてきている。	・生徒自身が考え、表現する機会をさらに増やすなど生徒の自発性、積極性を引き出す授業を行う。 ・生徒自らが考え表現し、意見交換することで、深い学びを実践している。 ・客観的な思考及び判断ができる。 【生徒授業アンケート】関連項目1・2・5については「はい」の回答が80%以上または年間で10%以上アップ。3・4については、「はい」を年間で10%以上アップ。	・校内研究授業を年3回(6教科)実施し、授業後には教員全員参加の研究協議を行って工夫した点や成果についての情報共有を行い得たものを授業で活用し、生徒に還元していく。 ・アクティブラーニング研修会を年2回実施し、協働・協調学習の視点による工夫を取り入れた授業実践につなげる。 ・調査の問題も「思考」「判断」「表現(論述)」を意識した出題につとめる。	・校内授業研究会やアクティブラーニング研修会を実施し、授業改善の契機とすることができた。調査も「思考力」や「表現力」を問う出題を意識し、単なる暗記で学習が終わらないよう工夫できた。 ・生徒アンケートを見ると、関連項目1・2の「はい」は平均で70%前後、項目5は50%前後であり、年間でアップも難しかった。項目3、4に関しては「はい」は30%前後しかも上昇率は約8%で、全体として年間で大きな改善は見られなかった。生徒同士が対話しながら学習する場面は増えたが、それを生徒の「考える」活動に効率よく繋げられていない。	C	・新年度も授業研究会やアクティブラーニング研修会を定期的実施し、引き続きWG等で「主体的、対話的、深い学び」に結びつく工夫を考えていく。 ・日々の学習において、生徒に「あれこれ考え、悩む」ことの重要性を意識させる。 ・授業アンケートの質問項目をより生徒の意識を読み取れるよう工夫する。また進路実現を目標に頑張っているS3生の意識を把握するために、S3はアンケートを12月に実施することを計画している。
	②学ぶことの意味を理解し、主体的に学ぶ意欲を高める	S1:部活動と勉強との両立に悩みながらも、授業を大切に学力を高めたいという思いが強い。 S2:チャレンジンググループ活動等を通して、学ぶことの意味についての理解が徐々に高まりつつある。 S3:オープンキャンパスに参加することで進路意識が向上した。チャレンジンググループ活動の学習を活かして、進路決定・進路実現につなげようとする生徒が増えつつある。	・将来に対し明確なビジョンを持ち、授業や家庭学習に意欲的に取り組んでいる。 ・隙間時間を自主学習に活用している。 ・学校内外の進路行事(講演会やオープンキャンパス)に積極的に参加している。	S1:学習・生活の軌跡を利用して、反省した点を次に活かすためにどうしたらよいかをしっかりと考えさせ、PDCAサイクルを充実させる。 S2:学習及び内容の充実のために授業力向上に努めると共に、個別の面談を行い、小まめな指導を行う。 S3:教員からオープンキャンパスの動機やプレゼン型の進路指導を行い、進路目標に関する生徒の視野を広げ、早期から具体的な進路目標を明確にさせる。	後期、生活のリズムが作れ、多くの生徒が部活動と勉強との両立に努力し家庭学習の時間が増加している。自己管理が出来るようになってきた生徒も少なくない。 ・学習意欲や進路意識も向上し、特にステージが上がるにつれて強く意識し、自覚するようになった。	B	・S1のできるだけ早い時期に学習と進路、生活習慣の関係を伝える講話を行う。 ・調査や模試を定点とし、担任等のチェックだけでなく、自分で振り返らせる。(SHR等を使っても良い。)
	③校外模試成績を含めた学力向上	S1:学ぶ意欲は高く、与えられた課題に対して熱心に取り組んでいる。 S2:S1からのバイオニアホーム研修を通して、生徒会活動や各自の学びに対する意識の高揚がみられる。 S3:公立鳥取環境大学での講義、岡山操山高校のリーダー生徒との交流などバイオニアホーム育成の企画により生徒のリーダー性や学校牽引役としての意欲が向上した。ただし、バイオニアホームの取組内容や意図が他ホームに伝わっていない。	・バイオニアホームとしての自覚を持ち、学校活動の意義や社会に対する理解が進み、学校のリーダーとしての資質を獲得している。(主体的・自主的な学習、チャレンジンググループ活動に積極的に取り組んでいる。) S1:学習や探究に対する意欲が高く、ステージの核となっている。 S2:見学や体験を通して、社会や自らの関心に対する理解を深め、その後の学習意欲や進路意識を高める。特にバイオニアホーム研修ではステージや学校のリーダーとして能力を発揮する。 S3:学校におけるバイオニアとしての自覚を持ち、主体的に学習や学校行事に取り組む。	・学校内の問題点や課題について問題提起し、生徒が議論する場を設ける。 ・様々な研修を実施し、その成果を発表する場を設定する。 ・バイオニア企画の情報を校内外に発信する。	生徒会活動のリーダーを務めるなど、バイオニアホームの校内におけるリーダー的意識が高まっている。ステージが上がるにつれて自覚している度合いが強い。 ・S2のシンガポール研修において、語学研修や異文化理解の面で他の生徒をリードしたり、バイオニアホーム研修においても準備から実際の交流にかけて意欲的に取り組んだ。	B	・バイオニアホームのステージ間交流の場を設ける。 ・4～6月までの時期にS3バイオニア生が直接S1生に指導・アドバイスをを行う場を設ける。
情報収集、情報発信の充実	学校の魅力、生徒の活動状況を積極的に情報発信する	【ホームページの運用】 ・更新が特定職員に偏っている(平成28年度の発信件数：160件)。 ・画面の修正・変更が必要(ホームページ上に廃止された部が残る)。 ・アクセス数は増加している。 (平成28年4月8日～同29年4月1日のアクセス数は約204,500件、それ以前の総アクセス数は、約228,000件)。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・時期をずらして、各年4回刊行している。 【ミッタシステムの運用】 ・S2・3生保護者の登録率が、それぞれ92%、74%であり、休校や災害時等の連絡ができない保護者がいる。	【ホームページの運用】 ・生徒の活動や必要な情報が適宜、掲載されている。 ・見やすく、わかりやすい画面になっている。 ・更新件数を300件とする。 ・項目を見直し、どの項目も年度内に更新する。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・保護者に学校並びにPTAの活動や方針等を適宜、伝える。 【ミッタシステムの運用】 ・全保護者が登録し、漏れなく緊急連絡を行うことができる。	【ホームページの運用】 ・担当した行事、部活動の様子を職員が速やかに原稿を作成し、管理職のチェックを経て、掲載する。 ・画面の修正・変更を、可能な範囲で行う。 【季刊倉西・倉吉西高通信の刊行】 ・『季刊倉西』では学校から保護者宛のメッセージを、『倉吉西高通信』ではPTA活動の紹介と参加呼びかけを主とした紙面とする。 【ミッタシステムの運用】 ・未登録の保護者に登録を呼びかける。	・拡大ステージ会には他ステージの教科担当者の参加が増え、回の目標に沿って、議論できた。 ・ステージ2現代社会(授業のない科目)の対策(担当者などが不明瞭で、模試ごとに付け焼き刃の対応になった。(ステージが主体となって計画的に対策を進める必要がある。)) ・S1 1月模試3教科SS平均52.7で目標数値を超えた。 ・S2 1月模試3教科SS平均46.1、国語47.4、数学48.0 英語45.7、理科計48.2、地歴公民計46.8 理科を除いて目標には届かなかったが、生徒の学習に対する意識が変化してきており、学力が向上し、学習時間も増加している。 ・S2 2月マーク5教科全国平均(394.4)の90%(354.9)超えの人数49名で目標値を超えた。 ・センター試験520点以上の数18名 ・センター試験考慮の推薦Ⅱ、AOⅡ、特別選抜で6名合格 ・意識変化は起こってはいるが値として十分とは言えない。	C	・S2次に授業のない現代社会の模試対策は地歴公民科と連携を図り、ステージが主体となって計画的に対策を施す。 ・S1については本年度同様7月模試結果がわかり次第目標値の設定を行う。 ・S3、S2については模試SS目標値を年度当初に設定する。そのために本年度中に現S1,2の担任団で原案を示しておく。 ・目標値の各教科への周知の徹底する。
	【中学生体験入学・中学校での高校説明会】 ・体験入学では、2日間で350名以上が参加し、「参考になった」の回答が99%以上(H28年度)。 ・中学校での高校説明会で、本校生徒による発表が好評であった。	【中学生体験入学・中学校での説明会】 ・参加者の満足度が90%以上 ・中学生や保護者が倉吉西高の情報を持っている。	【中学生体験入学・中学校での説明会】 ・チャレンジンググループ活動発表会のプレゼンを取り入れるなど、生徒の情報発信力を高める機会として有効に活用する。 ・ホームページの中学生へのメッセージを更新する。	・体験入学では、2日間で370名以上が参加し、「参考になった」の回答が99%以上であった。 ・チャレンジンググループ活動発表会のプレゼンを取り入れ、生徒の情報発信力を高める機会として有効に活用した。 ・ホームページで「中学生体験入学」の開催案内と、開催日2日間の様子を紹介した。 ・説明役の人選についても生徒会執行部と西高祭実行委員会からバランス良く選ばれており、どの生徒もやりがいを感じていた。	・ホームページ更新回数176件(1月末現在)で、昨年度同期(134件)より31%増加したが目標値の6割にも達していない。(目標設定値の見直しが必要。3割増程度が適当) ・保護者アンケートでは『季刊倉西』を毎回読んでいる割合が60%であった。紙面の工夫が必要。 ・ミッタシステムの登録率は1月末現在で 95% 受信確認メールの送信連絡に合わせて未登録者への登録依頼(3回)を行ったことで、未登録者が40人から16人に減少した。	C	・ホームページ更新 ・教職員各自が担当の部活動や関係業務の掲載に心がけ、グループ、ステージ内でも確認・呼びかけを行う。 ・保護者アンケートの結果を参考とし、『季刊倉西』、『倉吉西高通信』の既読が増えるように、内容・構成の入念な検討を引き続き行う。 ・登録状況、未配信状況を定期的(年3回)に確認し、その都度、未登録者並びに配信不能になっている保護者へ、登録を依頼する。 ・HP掲載のマニュアルを作成し、作業時間の短縮を図る。
							A

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
[90%] [80%] [60%] [40%] [30%]